

各水試発トピックス

宮本主査（道東センター）が「全国水産試験場長会会長賞」受賞!!

平成28年11月17日に山梨県甲府市で、平成28年度全国水産試験場長会全国大会が開催され、本年度の会長賞に道東センターの宮本主査が会長賞を受賞し、「TOM型浮上槽（自然浮上型魚卵収容人工ふ化育成槽）の開発および普及」と題して受賞講演が行われました。

当該ふ化槽の開発にあたって、順風満帆に事が運んだかというところとは問屋が卸さず、常に試行錯誤の連続で、その開発秘話として、開発途上のふ化槽が水圧で膨らんだり、下網が浮き上がった、ふ化仔魚が流出したりと色々と大変だったようです。でも、それら問題を一つ一つ解決しながら、新型浮上槽として完成させ、今日の表彰と相成った次第です。開発までの時間も、新しいふ化施設建設計画に際して、当該開発予定（この時点ではあくまで予定）の浮上槽採用が確定していたこともあり、突貫工事で事が進められ、実験規模、事業規模試験も含め、正味2年弱という非常に短いもので、火事場の馬鹿力ではありませんが、人間、危急に立たされたときに、通常では考えられない力を発揮した良い例かもしれません。開発に際した経緯等背景を簡単にお話します。

一般に、サケ稚魚のふ化放流事業においては、健康な種苗を生産することが重要です。そのためには、稚魚として泳ぎ出す前の栄養の袋（さいのう）を抱えた「仔魚」の時期に余計な運動をさせないように音や光等を遮断する必要があります。北海道では、仔魚の管理は一般的に養魚池で行っていましたが、広大な面積の養魚池を遮光して真っ暗な状態にしなければならず、そうすると、暗い

状態では仔魚の健康状態を把握できず、寄生虫感染症への対処が困難な状況でした。そんな時期に、新しいふ化施設建設計画が浮上し、養魚池に代わる新たな仔魚管理システムの開発が半ば強制的に求められたことが背景として挙げられます。

そこで、東北地方で普及している浮上槽の(1)省スペース、(2)低コスト、(3)管理の容易さ、に着目し、これらのブラッシュアップとさらに原虫寄生にも対処できるよう改良を加えることを目的に平成18年から開発に取り組み、サケの卵が手に入らない時期には、吸水性ポリマーを原料とするバブルジェリーを卵に見立てて水流の確認を行ったりしました。その結果、従来型の浮上槽よりもさらにコンパクトで、使用する水量も少なく、収容密度も高い新たな浮上槽が開発されました（試験研究は今 NO.663参照）。この新型浮上槽は開発関係者のイニシャルを取ってTOM型浮上槽と名付けられ、現在、北海道のサケ増殖施設の約3割、放流数で約2割がこのTOM型浮上槽によって生産されています。また、広く本州（岩手県・秋田県）にも導入・普及が進んでいます。

（小林美樹 さげます内水試場長）



写真 賞状を授与される宮本主査